

網野徹哉著 『インカとスペイン——帝国の交錯』

(講談社、2008年)

染田秀藤

はじめに

本書は単なるインカ史でもスペイン史でもなければ、「帝国」の比較史でもない。著者の言葉を借りれば、スペイン史を交えて、「先スペイン期のインカから、19世紀のインカまで」を通覧した作品である。すなわち、本書は、アンデス社会で生成した複数のユートピア像と「ペルー人」のアイデンティティを鋭く分析したペルーの歴史家フロレス・ガリンド (Flores Galindo, Alberto, 1949-1990) の名著『インカを探して』 (*Buscando un Inca*) に感銘した著者が未刊史料はもとより、数多くの先行研究を踏まえ、また、図像分析など、近年の新しい研究方法を取り込んで、インカ期から独立期 (19世紀) にかけて創出された複数の「インカ」表象を軸に、アンデス社会の変容と先住民をはじめ、アンデスに生きた多様な人々の複雑な心性^{メンタリティ}の変化を重層的に描き、「帝国の交錯」の社会的・文化的意味を解き明かした作品である。具体的に言えば、前半では、二つの「帝国」—15世紀前半にアンデス世界を統一した「インカ帝国」と、ほぼその1世紀後に「インカ帝国」を征服し、大西洋世界を支配するにいたった「スペイン帝国」—が誕生する過程とそれぞれの「帝国」の内実が明らかにされ、後半では、おもに「人とモノの移動」と「想像力 (思想) の交錯」に焦点が絞られ、およそ300年に亘るスペイン支配下のアンデス社会の動態が「インカ」表象との関係で描かれる。管見によれば、本書ほど、多層的なアンデス社会の動態とアンデスの人々の心性の変化を400年近くに及ぶ長期の時間的スパンで通観し、しかも、それをスペイン史と密接に関連づけ、正統派の歴史からひさしく抹殺されてきた「社会的弱者」に視点を据えて分析、解明した類書は世界でも数少ないといっても過言ではない。その意味で、本書はきわめて意欲的であると同時に、貴重かつ興味深い作品である。以下にその内容を簡単にみていくことにしたい。

構成と内容

本書の構成は以下のとおりである。

- (第1章) インカ王国の生成
- (第2章) 古代帝国の成熟と崩壊
- (第3章) 中世スペインに共生する文化
- (第4章) 排除の思想 異端審問と帝国
- (第5章) 交錯する植民地社会
- (第6章) 世界帝国を生きた人々
- (第7章) 帝国の内なる敵 ユダヤ人とインディオ
- (第8章) 女たちのアンデス史
- (第9章) インカへの欲望
- (第10章) インカとスペインの訣別

第1章では、インカ社会が先インカ期から存在した汎アンデス的な社会経済システムを利用しながら「帝国」へと発展していく過程が「互酬関係」の一方的支配と「インカ的神聖王権化」を軸に解明され、とくにインカの国家イデオロギーとなる「太陽神信仰」の重要性が強調される。ここで注目しなければならないのは、著者が、先スペイン期のアンデスが無文字社会であったため、今日知られている同時期に関するアンデス情報には数多くの問題（「クロニカに内在するバイアス」など）が潜んでいることを、「通説」のインカ単一王朝説や王朝発祥の地をめぐる自己の体験をもとに指摘し、とくにインカ史研究につきまとう困難さと慎重な史料批判の重要性を意識しながら筆を進めている点である。さらに、著者はスペイン側の論理で創出されたインカ単一王朝説の「占有」をめぐる先住民たちの心性を論じ、本書を貫く独自のアンデス史観を垣間見せる。

第2章では、著者は「通説」やクロニカ情報に加えて、巡察の記録など、一次史料に依拠しながら、インカ国家が非対称的な互酬関係にもとづいて実施した巧妙な帝国統治（「インカの平和」）の実態を描く。ついで、著者は、聖都クスコが発する遠心力（征服活動=拡大）と求心力（地方統治=統合）が領土拡張にともなって次第に均衡を失い、その結果、ワスカル（Huácar）とアタワルパ（Atahualpa）という異母兄弟間で王位継承をめぐる血腥い軋轢が発生し、最終的に、スペイン人の侵略・征服が可能になったと論じ、それらの原因をインカの国家体制内部に潜在した政治的・社会的要因—不安定な王位継承システムや王家の形成とその特権的地位、王家の私領成立とミティマエス（強制的に移住させられた非インカ系先住民）の増大—に関連づける。

第3章と第4章では、著者は舞台をアンデスからイベリア半島へ移し、15世紀末に「新世界」へ乗り出したスペイン人征服者たちの心性や行動様式を読み解くため、キリスト教、イスラーム教とユダヤ教という、異なる三つの宗教と文化が「共生」する特異な時代を経験した中世、とくに14世紀末から近世にかけてのスペイン社会の動態を明らかにする。第3章では、8世紀初頭を嚆矢とするイスラーム教徒からの国土再征服運動の過程で、スペインのキリスト教社会が異なる二つの宗教とその文化と緊張関係を保ちながら「共生」→「対立」→「排除」へと、思想的に移行していく複雑で非直線的な変化の様子が描き出される。つづいて、著者は征服者の心性の中核をなす聖戦思想や、とくにポグロム（ユダヤ人虐殺）となって表出する反ユダヤ主義の生成・変化とその発展（キリスト教社会における改宗ユダヤ人に対する不信感や敵意の増幅と「血の純潔」思想の定着・拡大）の政治的・社会的背景を具体的な例を挙げて論じる。

第4章は、「フダイサンテ」（隠れユダヤ教徒）をキーワードにして、「共生」を持続させる流れが認められる一方で、15世紀末のカトリック両王期にスペインという「諸王国の連合国家」が成立する過程で新設された「異端審問」が政治的機能を担った結果、「排除」のイデオロギーが次第にスペイン社会の主流になっていく状況を興味深い具体例（グァダルーペの異端審問）をあげて明らかにする。最後に、著者は、1492年3月の「ユダヤ人追放令」で顕現する「排除」のイデオロギーがそれに激しく抗うイデオロギー（メシア待望運動）を生み出し、両者が激しくせめぎあう歴史的環境下、「インカ帝国」がスペイン人の前に姿を現し、二つの「帝国」の交錯がはじまると説く。

第5章では、まず著者は「新世界」へ渡ったコンベルソの行動を例示しながら、「インカ帝国」の征服には、長期に及ぶ異文化との「共生」を通じて鍛え上げられたスペイン・

キリスト教社会の「排除」のイデオロギーとコンベルソたちに共有された、反ユダヤ主義からの「解放」を求める強い願望とのコンフリクトが発する大きなエネルギーが注がれていくと説き、イベリア半島の歴史的経験が「新世界」へ放射されていく様を描く。ついで、後半では、ピサロ (Pizarro, Francisco) 麾下のスペイン軍の侵略を受けたころのインカ帝国の政治状況、すなわちワスカルとアタワルパの対立や非インカ系民族集団のクスコ支配からの離脱の動きなどから説き起こし、スペイン軍のクスコ占領後に勃発したマンコ・インカ (Manco Inca) を領袖とする、いわゆる「インカの反乱」へ筆を進める。ここで、著者は従来のインカ征服史論ではあまり重視されなかったインカの存在に着目する。マンコの「反乱」に加担しなかったため、スペイン支配に「迎合的なインカ」として「負」のイメージで語られてきた、マンコの異母兄弟にあたるパウリュ (Paullu) である。著者はパウリュをはじめとする「親スペイン系インカ貴族」の存在と彼らのその後の行動に注目し、そこに異文化との「共生」を求める先住民の心性を読み取る。そして、著者によれば、それは、16世紀後半に勃発したペルーのエンコミエンダの世襲化をめぐる運動の中で先住民首長たちが示したスペイン国王との直接交渉にも通じる心性であった。換言すれば、著者は、アンデスを舞台に、「排除」と「共生」というイデオロギーの対峙がときに主体と客体を変えて、ときにさまざまなグラデーションを示しながら、重層的に表出したと主張する。その対立を覆い隠すような形で植民地社会にあらたに適用されたのが、著者の言葉を借りれば、「血の純潔」のイデオロギーに通底する「スペイン人の政体」^{レプブリカ}と「インディオの政体」^{レプブリカ}という新しい統治理念である。最後に、著者はトゥパク・アマル (Túpac Amaru) の処刑 (1572年) で終息する「インカの反乱」の顛末にふれて、当時、副王トレド (Toledo, Francisco de) がスペイン国王によるペルー支配の正当性を訴えるために、また、反スペイン系インカを歴史的に抹殺することを目的として編纂させた「公式なインカ王朝史」(「歴史化されたインカ」) を「血統」にもとづいて受け入れた親スペイン系インカの中から、「排除」のイデオロギーにもとづいて創出された「インカ史」に異議申し立てが行われた事実を取り上げ、歴史操作に抗う先住民の姿に注目する。

第6章は、16世紀、「日の没することのない帝国」と称されるほど、広大な領域を支配したハプスブルグ朝スペインの盟主カルロス一世 (Carlos I) およびフェリペ二世 (Felipe II) の治世 (ポルトガル王国を併合し、同君連合の成立) におけるアンデスの人々と「帝国」の関係をグローバルヒストリーのコンテキストで読み解こうとした意欲的な章である。著者はまず、特権授与を求めてスペインへ渡航した先住民の例を紹介したあと、王室の渡航禁止令にもかかわらず、文書主義ともいべき帝国の官僚的形式主義の間隙をぬって、コンベルソのみならず、さまざまな国や身分の人々が密航者として、それぞれの夢をかなえるために大西洋を横断して帝国内を移動したことや、大西洋を媒介にして地球規模での人の移動が始まった事実を明らかにする。ついで、著者は話題を「モノの移動」に移し、慢性的な財政逼迫に喘ぐスペイン帝国の重要な収入源になったポトシの銀を取り上げ、史料を引用して、グローバルな経済世界、すなわち「近代世界システム」成立の重要な一翼を担った大西洋貿易の陰で、ミタ制 (輪番制の強制労働) のもと過酷な鉱山労働を強いられ、先スペイン期にはその使用がかなり限定されていたココとチチャ酒に救いを求めるしかなかった先住民たちの悲惨な労働実態を描く。そして、最後に、著者は、銀が大西洋のみならずアジアへ通じる道を開いた経緯とその実態を明らかにし、そうして、「銀

の道」を介して、スペイン（ヨーロッパ）—アンデス—アジア（日本も含む）を円環的に結ぶ地球規模の「人の往還・モノの交流・想像力の交錯」が可能になったと論じる。

第7章では、著者は布教活動と植民地社会の関係に焦点を移し、16世紀末から17世紀前半にかけて、アンデスのスペイン人社会に放射されたイベリア半島の「排除」と「共生」のイデオロギーが布教方法をめぐって、征服後間もない時期の「共存」から「対立」へ変化し、さらに両者の対立が次第に先鋭化し、ついには「排除」のイデオロギーが支配的になっていく過程を、第五代副王トレドの強制集住政策、異端審問の設置、「異端」とされたドミニコ会士クルス（Cruz, Francisco de la）の処刑や偶像崇拜根絶運動を介して明らかにする。著者は千年王国主義と結びついた「インディオ・ユダヤ人同祖論」をキーワードに、その質的な変化を17世紀初頭に先住民を対象として大規模に実施された偶像崇拜根絶運動に読み取る。ついで、著者は同じコンテキストで、「カトリック王国」が同君連合としてイベリア半島に存在した時代（17世紀前半）、「新世界」、とくにリマを中心にアジアにいたる商業ネットワークを構築した強力なポルトガル系ユダヤ人商人たち（コンベルソ）が辿った歴史的経験と彼らの心性を取り上げ、その代表的な人物ペレス（Pérez, Manuel Bautista）が異端として焚殺刑に処される過程を詳細に描くことによって、宗教的純粋性が「排除」の理論として政治的機能を果たしたことを明らかにする。

第8章では、著者は、宗教的純粋性を理由に、リマの商業界を支配したユダヤ人男性たちが社会的に抹殺されたあと、男性中心の社会原理が支配的な植民地社会で、女性たちが人種や階級差をもものともせず遅く生きるさまに着目し、当時のジェンダー概念を軸に、アンデス社会の女性、とくに先住民女性たちの動態を考察する。この章では、従来あまり顧みられることのなかった、インカ期ならびにスペイン支配期のアンデス社会における先住民女性の役割に焦点が合わされ、その歴史的な意味が論じられる。著者は、征服後間もない時期に、スペイン人男性との関係を余儀なくされたインカ皇女たちの存在に、インカ期のアクリャに通じる「女性を介した政治的関係」の再現を読み取り、彼女たちが自らの身体を犠牲にして「混血」という新しい「果実」をもたらすことで「インカとスペインを結びとめた」事実、「接続された歴史」の一例を見てとる。そうして、著者は、インカ皇女をはじめ先住民女性がスペイン人との「共生」のための「蝶番」として利用された事実を根拠に、インカ支配とスペイン支配を介して、先住民社会においても、男性中心の社会原理がジェンダー概念として定着していったことを明らかにし、同時に、スペイン人女性の絶対数が少なかった植民地時代初期のスペイン人社会において、「蝶番」となった先住民女性を母として生を受けた混血の娘たちが「スペイン人女性」として重要な役割を担った事実「帝国の交錯」の社会的・文化的意味を探る。

つづいて、著者は同じコンテキストで、ヨーロッパ社会におけるジェンダー概念に触れて、女性嫌悪の思想を取り上げ、それと表裏をなす、女性固有の霊的能力に対する「畏怖」の感情が一方では「聖女」を、他方では「魔女」を生み出す思想へ発展したと述べ、植民地社会でも女性とその固有の力（魔術）を生存戦略の武器として利用していた興味深い事実（魔女の存在）を紹介する。さらに、著者は17世紀後半のリマにおいて、偶像崇拜根絶運動の中で逮捕された先住民の「魔女」ファナ・デ・マヨ（Mayo, Juana de）の審問記録から、植民地社会で魔術が「脱人種性」を特徴としていたことと、その魔術にアンデスの伝統とヨーロッパ的観念が接合されていたことに注目する。最後に、先住民、非先

住民を問わず、魔女たちがココアの葉を媒介として「インカの力」の「占有」を求めた事実を重視し、そうして女性たちの間で生成された「インカ」表象が、16世紀後半に創出された「公式なインカ王朝史」とは無縁なもの、換言すれば、「脱/非歴史化されるインカ」表象（「インディオ的インカ」）として、以後のアンデス社会を流れる一水脈となっていくと主張する。

第9章では、著者は、アンデス社会において「インカ」表象をめぐって三つの流れが生成したことに、「帝国の交錯」の歴史的意味を探ろうとする。著者は、16世紀後半において、まずインカ貴族（24選挙人会）がスペイン側の論理で創出された「公式なインカ王朝史」を「血統」にもとづいて占有することでスペイン人との「共生」を目指したのを「第一の流れ」とし、ついで、「インカ」表象の占有をめざす非インカ系先住民の動きを「第二の流れ」（「再歴史化されるインカ」）と規定し、彼らの行動とその歴史的意味を論じる。さらに、グアマン・ポマ（Guamán Poma, Felipe）をはじめ、アンデス先住民たちに、イベリア半島のイデオロギー（「純潔」）が深く浸透していったことを明らかにしたうえで、未刊史料の「ベタンクール家文書」を援用して、オロペサ侯爵領の継承権に絡んで生じた「インカ」表象の占有をめぐる熾烈な争いが1780年に勃発した反乱の首謀者で、「トゥパク・アマル二世」を名乗った「混血」のコンドルカンキ（Condorcanqui, José Gabriel）へと受け継がれていく過程を描き、「反乱」が従来のように、二項対立的な運動としては捉えきれないことを示唆する。そうして、著者は植民地時代後半、アンデス社会で、「インカ」表象をめぐる激しい二つの水脈（イデオロギー）の対立と、それとは次元を異にする第3の水脈、つまり、著者が第8章で取り上げた、「インカの力」を求める民衆の心性とが複雑に絡みあいながら収斂していく過程を追い、その意味を読み解く。

第10章では、まず著者は、18世紀初頭、スペイン継承戦争後に登場したブルボン朝スペインがおもに財政立て直しを目的に植民地で実施したさまざまな経済政策、とりわけ税制改革（増税）に対して、先住民のみならず、混血やクリオーリオなど、アンデスの民衆が示した抵抗運動の中で、「インカ」表象をめぐる三つの流れが次第に収斂して噴出したのがコンドルカンキを領袖とする、いわゆる「トゥパク・アマル二世の反乱」であると主張する。ついで、著者は、反乱鎮圧後にスペイン王室が採った、「インカ」の力を抹殺する政策により、「インカ」表象をめぐる三つの流れが寸断されて消え去り、アンデスにおける先住民と白人の「共生」の可能性が見果てぬ夢に化したと断じる。つまり、著者は、アンデス社会において、先スペイン期の「神格化されたインカ」が16世紀半ばの「歴史化されたインカ」を嚆矢として、植民地時代を通じて「再歴史化されたインカ」と「脱/非歴史化されたインカ」という、三つの異なる流れを創出し、それらは18世紀末にいったん一つに収斂したものの、19世紀初頭には、「主体なきインカの歴史化」という形で完成したと結論づけるのである。

おわりに

以上、ごく簡単に本書の内容を章ごとに追ってみた。本書は、著者がフロレス・ガリンドの研究成果を踏まえ、近年フランスの歴史家グリュジンスキ（Gruzinski, Serge）が「カトリック王国」を分析規模に設定し、二項対立的な思考とは対立するようなメスティーンズの思考をキー概念に、とくに従来の国民国家史を超えたマクロな歴史を「接続された歴

史」という切り口で提示したように（「カトリック王国—接続された歴史と世界—」竹下和亮訳 『思想』第937号所収 [岩波書店、2002年]、71-116頁）、「スペイン帝国」を分析規模として、メスティーソ的思考で、インカ支配期からスペイン支配下の植民地時代を経て独立期にいたるアンデスの社会と思想のマクロな歴史を描いた作品である。つまり、著者はアンデスの人々とその社会の変遷を「接続された歴史」の視点から鋭く解き明かしたのである。それは、例えば、従来のアンデス史観に通底する「征服者（スペイン人）対 被征服者（先住民）」、あるいは「支配者（白人）対 被支配者（先住民や混血などの非白人）」といった、二項対立的な視点からはとうてい描き出すことができないアンデス社会の動態が「インカ」表象をめぐる三つの流れを軸に、スペインのみならず、当時の「世界」の歴史的脈絡に位置づけられて解明されていることから窺える。

とは言え、本書に問題がまったくないわけではない。例えば、先スペイン期から17世紀前半のアンデス社会の動態と、イベリア半島の同君連合が崩壊したハプスブルグ朝支配期の後半から18世紀後半のブルボン改革期にかけてのアンデス社会の動態に関する記述を比較すると、明らかに前者に比重が置かれ、その結果、後者に関しては、例えば、リマやクスコなど、都市部の「特殊な」状況がアンデス社会全体へ敷衍されるなど、やや牽強附会的な見解が散見される。しかし、それは、世界の学界において、アンデス史研究が主にクロニカの分析に大きく依存して、先住民文化や征服史の解明に重点を置いた時期から、膨大な量にのぼる未刊の土着史料・地方行政文書・訴訟文書・教会文書などを利用し、さまざまな遺跡、建造物、絵画、工芸品なども分析対象として、多様な民族集団の住むアンデスの地方史、とくに17世紀半ばから18世紀後半にいたる植民地時代史の解明へ、大きく方向を転じてまだ日が浅いことを考慮すれば、許容される範囲の瑕疵と言えるだろう。その意味で、本書は著者の今後のさらなる研鑽と発展を大いに期待させる作品である。最後に、著者が現地体験をちりばめながら、「過去との対話」の意味や重要性をそれとなく読者に語りかける、その巧みな歴史叙述は特筆に値する。